



## 盗まれたムンク

《叫び》、《マドンナ》との再会

ノルウェー・オスロ市在住

木村 博子

ノルウェーの芸術家エドヴァルド・ムンク (Edv.Munch: 1863-1944) は、ナチスドイツ占領下のオスロで、住居、油彩、リトグラフィ（石版画）、木版画、水彩、素描、手紙、写真やメモ帳、家具等を、美術館を建築することを前提として、オスロ市に遺贈しました。彼の生誕百年の1963年に市立ムンク美術館が開館しましたが、リンゴの木のある絵のモチーフになったエーケリー (Ekely) の農場の土地は芸術家が住み活動するコロニーとなり、彼が住んでいた住居は取り壊され、現在残っているのは「冬のアトリエ」と呼ばれる建物だけです。

ムンクの《叫び》はオスロでも二度の盗難があり、世界的なニュースとなり、「最もよく盗まれる絵」とよばれているそうです。国立美術館では、リレハンメルで冬季オリンピックが開催された1994年に、世界中から来る人たちにムンクを見てもらうのということで、常設の2階のムンク・ルームから急に一階の展示場に移しました。けれども、その初日の早朝に国宝級のムンクの油彩《叫び》が、窓から入られ数分間で盗まれてしまいました。ムンク美術館では、2004年に突如拳銃を持った強盗に襲われ、最も有名な二枚《叫び》と《マドンナ》が持ち出されてしまいました。追跡搜索の後戻った絵は傷つき破られたま



《叫び》の絵の前で説明を聞く「シヨルベルグ学校」の10歳の子どもたち

まで5日間だけ展示され、その後修復と復元のため非公開でした。その2枚が2008年5月22日のこの「再会展」のオープニング式典でやっと公開されました。そこには盗まれた絵画の捜査に貢献した警察側の代表と共に、捜査・修復プロジェクト経費として多額の寄付をしてくれた日本の石油会社からも、また日本大使館の代表者の方々も出席されていました。「ムンク美術館友の会」の一会員である私にとっても本当にうれしい日でした。

ムンクの有名な作品には「バージョン」が各種あり、油彩だけでなく、リトグラフィ（石版画）、木版画、デッサン（素描）と多数ありますが、今回の展示には《叫び》と《マドンナ》の同じテーマやモチーフの似た各種「バージョン」が、列になって展示されています。これだけの作品が列



絵が戻ってきて、さらに好評を呼んでいるケーキ

をなして展示可能なのはムンク美術館ならではの光景です。この「再会展」終了後の8月以降も更に修復を続けるそうで、使用された工具や修復・復元の工程はパネルで説明され、これはまもなく映画となり、文書類はデジタル化され、カタログも作成中だそうです。

### 子供たちの文化体験と次世代のための文化・情操教育

当国の文化教育政策「文化の学校カバン (Den kulturelle skolesekken)」は、本や授業だけで学ぶのではなく、「子供達の人生のランドセル」に美術館や博物館等の体験・見学を入れて学ぶ制度です。8月末の新学期から一年間に約六千人の生徒たちがムンク紹介・案内・工作等を体験できるように、オスロ市は予算を取って、次世代の教育に力を入れるそうです。